



学会ワークショップ「子ども食堂を考える」(2022.5.28)より収録
司会：土田雄一(千葉大学教授)

<目次>

- | | |
|-------------------------------|------|
| 1. 子ども食堂を考える—コミュニティづくりの柱として | 滝口 優 |
| 2. 子ども食堂の現状を考える—子どもの貧困問題の側面から | 森永徳一 |
| 3. 子ども問題対策の失敗をも意味する「子ども食堂」 | 深谷昌志 |

子ども食堂を考える

—コミュニティづくりの柱として—

日本子ども支援学会ワークショップ

2022年5月28日

白梅学園短期大学名誉教授 滝口 優



1. こども食堂という名称について

「こども食堂」という場合は焦点が子どもにあたりがちであるが、近藤博子・湯浅誠によれば「こども食堂は、こどもの食堂ではない」(近藤博子・湯浅誠 2016)し、「こども食堂とは、こどもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」(同上)である。「一人暮らし高齢者の食事会に子どもが来られるようになれば、それも『こども食堂』」(同上)とされているように子どもだけが対象ではないという。子どもを窓口にして大人や高齢者が参加できるものという考え方である。



2. 論文や書籍等

一般的にこども食堂と言ってもひらがなで「こども食堂」という場合と「子ども食堂」として一部漢字にする場合と、全てを漢字にして「子供食堂」とする違いがある。論文や書籍の検索を行うと以下の通りである。CiNii (論文検索)では「こども食堂」132(論文 120、本6、博論1、プロジェクト5)、「子ども食堂」327(論文 293、本 13、プログラム 21)となり、国立国会図書館では「こども食堂」198(2016年練馬区)、「子ども食堂」477(2015年豊島区)、「子供食堂」6となる(2022年5月3日現在)。圧倒的に「子ども食堂」となっている。

3. こども食堂のはじまり

こども食堂がいつごろから始まり、どのように発展したのかについて上記の近藤・湯浅の傾聴の中では以下のように紹介されている。

- ・2011年:「気まぐれ八百屋だんだん」の一角に「こども食堂」が設置された
店主近藤博子(歯科衛生士+居場所づくり)
- ・2012年:東京都豊島区要町に「要町あさやけ子ども食堂」WAKUWAKU
- ・2015年:「こども食堂ネットワーク」と「こども食堂サミット」WAKUWAKU
- ・2018年:「こども食堂安心・安全向上委員会」2236軒
- ・2019年:「ファミマこども食堂」
- ・2019年:「全国こども食堂支援センター・むすびえ(湯浅誠)」調査、3718か所延べ160万人

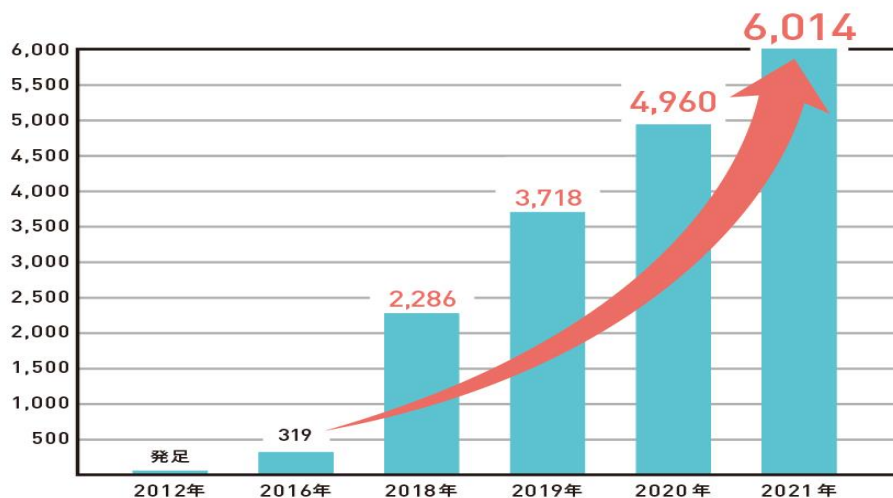
4. なぜこども食堂か

労働環境の悪化、非正規労働者の増加など労働者の視点からのアプローチは数多く行われてきたが、日本の貧困についてそれを正面から取り上げるといことはあまりできていなかったように思える。しかし子どもの貧困率が衝撃的(2012年16.3%)に紹介され、それをどうしたらよいのかという思いと東日本大震災を背景に「こども食堂」に注目が集まったように思われる。

前述の近藤・湯浅によれば、「『こども』『食』という“必殺アイテム”を並べたこの簡潔なネーミングが、誰のために何をするかをこれ以上ない形で明確に表わす。こども食堂の広がり、このネーミングを抜きには語れない。」(近藤博子・湯浅誠 2016)ということになる。それを整理すると以下ようになる。

- ① 誰もが心を寄せる「こども」への視点が入っている。
- ② 「食べる」という具体的行動への視点が入っている。
- ③ 食づくりというわかりやすい支援への視点が入っている。
- ④ 食べながら、作りながら行う交流への視点が入っている。
- ⑤ 何か役に立ちたいという慈善への視点が入っている。

II. 「こども食堂」の現状1. 全国のこども食堂の箇所数推移 (2021年12月むすびえ調査)



こども食堂の発足が2012年で、最初の4年間はゆっくりとしたペースであったが、この5年間は一気に拡大し、2021年12月末現在で6014か所に達している。全国の自治体がおよそ1800と言われている中で考えると、各市町村に平均3か所以上存在していることになる。歩いていくには広すぎるが、手の届く距離に「こども食堂」が存在していることになる。小学校の数が20000を少し越えるところから考えると、近々各小学校区に1つの「こども食堂」が生まれることになる。

2. 主催者・団体の状況

ではこうした「こども食堂」を運営している団体はどんなところだろうか。これも「むすびえ」の調査から引用したものであるが、①任意団体(市民活動)42.9%、②NPO法人16.2%、③個人13.0%、④社会福祉法人5.9%、⑤任意団体(自治会・町内会等)4.9%、⑥社団法人4.8%、⑦その他(宗教法人、企業、社協等)となっている。公的なものは少なく、圧倒的に民間の取り組みに依拠していることがわかる。

3. 開催場所・費用等の状況

また開催場所については、①公的施設(学校、公民館、児童館、神社、お寺、教会等)、②準公的施設(社会福祉協議会、介護施設交流スペース、保育園、大学食堂等)、③私的施設(個人宅、空き家、事務所、空き店舗、飲食店等)となっており、公的な場所も活用されていることがわかる。なお費用については基本的に子どもは無料か半額で、大人は有料となり、材料提供などを得て運営を維持している。

Ⅲ. 「子ども食堂」と地域

こども食堂が実施している地域づくり活動は以下のような数字になっている。最も大きな理由が「世代間交流」であり(66.8%)、「食品ロス削減する取り組み」(43.7%)がその次に来ている。その他、「大学生等の地域の若者の参加を促す取り組み」(32.5%)、「地域の会合・イベントへの参加」(26.4%)「自治体等の協議会への参加」(22.2%)及び「従来の地域団体活動の活性化」(22.1%)となっている。高齢化が急速に進む中で世代間の交流が重要な意味をもっているというのがこども食堂実施者の願いであるということがわかる。

Ⅳ. 「子ども食堂」のこれから

「昔には戻れない現在という地点において、未来へ向けて新たな“場”を創り出していこうという試み」(近藤・湯浅 2016)に象徴されるように、「こども食堂」が既存の組織やつながりを越えてあらたな「居場所」づくりになっていくのではないかと。具体的な「こども食堂」の成果としては以下の通りである。

- ① 「こども食堂」を通じて子どもの貧困問題に正面から取り組んでいる
- ② 「こども食堂」を通じて地域づくりがすすむ可能性ができてきている
- ③ 「こども食堂」を通じて誰でも支援に参加できる形が見えてきた
- ④ 「こども食堂」を通じて行政を動かす可能性ができてきている

なお詳細は省略するが、課題としては以下の点が考えられる。

- ① 材料費も含めた運営資金をどうするか
- ② 食事を調理・提供する施設の不足
- ③ ボランティアの確保と割り振り
- ④ 栄養面、衛生面の管理と調整
- ⑤ 支援対象者

<参考文献等>

- ・子どもの貧困対策の推進に関する法律 2013
- ・近藤博子・湯浅誠 2016 *<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20160724-00060184>
- ・堀内雄斗 2019 「子どもの貧困」の把握と対策 国立国会図書館「調査と情報」
- ・南出吉祥 2017 子ども食堂で問われる「子どもの貧困」教育 10月号
- ・むすびえ 2022 第1回全国子ども食堂実態調査 <https://musubie.org/news/4881>
- ・森永徳一 2022 こども食堂を考える改訂版



<余録1>

子ども食堂の現状を考える

—子どもの貧困問題の側面から

森永 徳一(元公立中学校校長・こども支援士)

私事ですが、教育現場に40年近く身を置きました。都内の公立中学校の校長を引退し、地元の公立の大学の非常勤講師を退職後、今も脳裏から離れない最大のテーマは、「子どもの放課後の危機をどうするか」と、「子ども食堂の開設・拡張」です。

1) 子どもを取り巻く環境と課題の中で

日本の教育の課題として気がかりなことは多々あると思いますが、「子どものスマホ・ゲーム依存症候群」、「幼児教育(認定子ども園)」の問題、「学校生活時間・空間の(ある意味で)過酷な状況」、「子どもたちの放課後の生活」の問題等々の中で、「子ども食堂」の問題は、そのひとつかもしれません。そこには「子どもの貧困問題」や「居場所づくり」等にかかわる大きな課題があるからです。

2) 子どもの食事をめぐって

「子ども食堂」を考える前に、家庭・学校給食の様子を少し考察します。子どもの食事は、朝夕は家庭であるのが通常ですが、それもできない子どももいます。昼は保育園も幼稚園も「給食」があり。小中学校はほとんどが、「学校給食」です。自治体間でその態様には大きな差異はありません。「自校調理方式やセンター調理・搬送方式等」で、子どもの「学校給食」は成り立っています。給食費が未納だからと言って、「給食」が食べられないことはありません。その未納は保護者の問題で、未納額の総額は年間20億円以上と言われますが、1食が、300円以内/1月で、小学校で4200円/月。中学校で4800円/月。年齢に応じて、栄養価を管理する栄養士により一ヶ月の献立表が作られ、中学校は820キロカロリー/1日、小学校の1・2年は520キロカロリー/1日です。教室で同じものを友達と食べることが出来る。これが一般的な日本の「学校給食」です。

最近では、牛乳・デザート、時には郷土の特産品も出ます。アワビやウニ、マツタケ御飯さえあります。四季を通して、「日本の給食」には凄いメニューが出る学校があります。給食で、日本の四季(年中行事を通して)知ることもできます。正月のお餅や七草雑炊～師走のクリスマスケーキまで、配膳されることも。食物アレルギーにも対応(別メニュー)されることもあります。

余談になりますが、私自身、ランチルームのある中学校の校長時代は、公務の出張の無い日には、ランチルームで1年～3年、特別学級3組、合計33学級の生徒と「給食会(ランチ会)」を持ちました。「年間学校行事予定表」により、校長ランチ会の計画は、しばしば延期もされましたが、「ランチ会」の当日は、学級の代表と給食担当の班長は、朝から大変です。朝の学活終了後、校長室に来室、予定を尋ね、前の黒板に「ランチ会」(40分:年間計画)◎とマークします。それを見て、集合時間、会食開始時間などが決定され、準備担当者は大変だったようです。(クラスの雰囲気・クラスカラーが表出されるので、担任はむろんハラハラ・ドキドキです)でも、楽しい会になりました。「ランチ会」の後には、校長との「Q&A」timeをもったりもしました。「ランチタイム」より、この「ショートtime」(10分)で、学級の質問が事前に用意・精選)されて、回答者も大変でした。次の「校長ランチ会」実施予定の学級代表は、希望して同席も出来ましたが、ほとんどが実施済の学級に情報収集していたようです。私の大好物の「偽の情報」を流されたりもしました。これも、今では、楽しい思い出の一つです。

3) 昼食の風景

「学校給食」の話に戻ります。「給食」といえば、教育先進国のスウェーデンは、どうなっているのでしょうか。給食費は無料ですが、パンとスープとおかずだけと聞きます。それでも、「バランスのとれた給食」。さすがに、社会福祉国家、よく考えられたものです。

日本の高等学校は、公立も私立も大半は「食堂」や「売店」(購買部?)を持ち、時間内で自由に食べることが出来ます。しかし、高校では一斉に食べるほどの大食堂がないために、学年時差のところもあります。食堂のメニューも限定されているために、「弁当持参」の高校生が殆んどのようです。食費が、高額になり、偏ったものや好きなものが食べられないので、家庭からの弁当持参が高校生の日常食(昼食)の実態です。大学生・会社員等を含めたサラリーマンは、学食・社員食堂で「食事」をとるのが一般的で、その他は「持参弁当・外食」です。私の大学時代のNo.1メニューは「ハヤシライス」、近くのホテル(HTH)のNo.1メニューは「カツカレー」でした。

人間の「食」は公私、老若男女、大人も子どもも、欠かすことができません。人間は「食」が満たされないと心身のバランスがとれなくなるのは、自明の理のようです。

4) 「子ども食堂」のあれこれ

「子ども食堂」のルーツは、明治22年(1889年)に、山形県の鶴岡市でお寺の住職が恵まれない子どもたちのために、寺に小学校を作り「お握りと漬物」を出したのが、「給食始め」(子ども食堂)のようです。これが「給食はじめ」です。

しかし、子どもの食事の態様は、「給食」や「弁当」の配布はしますが、実態は違います。『子ども食堂』とは、地域の大人が子どもたちに無料で、安価な食事を提供し、貧困や孤食状態の子どもたちが安心して過ごせる場所や食事の時間などをつくることを言うようです。地域のNPO団体や児童支援グループやお寺おやつクラブ(天理市)等、21世紀の2020年以降、急激に増加し、日本の各地で取り組みが始まり、驚くほどの広がりをみせているようです。

①その目的は「食事を提供する」ではなくて、父子家庭や母子家庭・養護施設などの子どもたちの『居場所づくり』の創設でしょうか。食堂の食材は、「地産地消」が多く、肉屋・八百屋・魚屋さんなどからの無償提供や安価な提供なくしては、成り立たないのが現実のようです。

②食堂の料金は、子ども100円均一、大人500円～300円、また無償等、様々です。週に2～3回提供されるのが通常のようなようです。

私の住む埼玉県では、4年前の2018年11月に大宮ソニックシティ地下1階で、「子ども食堂フォーラム」がありました。「子ども食堂とは?」、「居場所づくりの取り組み」等が、映像やパネルで紹介され、運営団体の事例発表がありました。ここ2年間は、コロナウイルスのまん延で中止になりましたが、とても有意義な会(ワークショップ)となりました。食堂のメニューやボランティアの募集等、ボランティア団体の個性が發揮され、課題を持ちながらの発表会(ワークショップ)で、私自身の学びの機会にもなりました。

③『子ども食堂』の広がり(埼玉県、関東地方、近畿周辺は…)

埼玉県では、さいたま市、川越市、越谷市、熊谷市、深谷市、本庄市、上尾市、鴻巣市、富士見市等高崎線、東武線沿線の各都市に広がりをみせています。

都内では、中央線沿線の多摩川流域の西部の各都市、墨田区や江東区、江戸川区等江戸川・荒川の下流域の諸都市、北区・足立区や豊島区等先進的な取り組みの区もあります。その取り組み、実施形態は、山手線の内と外、高低差があります。多摩地域にも特色ある取り組みがありますが、その実態が、中々見えてきません(市町村の特性も存在)。西日本では、大阪府内、神戸市、尼崎市、京都府内等の市区の取り組み

は、近年盛んになりました。奈良県では、天理市や大和郡山市、奈良市等は市長や教育委員会がバックアップしているところもあります。しかし、運営の中心は、NPO法人の運営委員の皆さんです。日本の各地、その運営は地域の様々な個人や団体の人々(主婦・自営業者・団体職員・学生・僧侶等)による奉仕・支援活動などにより成り立っています。(マンパワーが主力)大学生の運営による『子ども食堂』は、「食の提供」だけでなく、学習支援や趣味、スポーツ等の活動を通して「子どもの居場所づくり」に貢献してくれています。一人でも子どもたちが、安心して過ごせる居場所づくりに役立っています。(全国の大学生支援組織の活動)

④『子ども食堂』の運営とメニュー

子ども食堂に来る子どもたちの様子を見学すると、保護者同伴や友達、一人で等、様々です。そこには、地域の人たちの見えない見守りがあります。サラリーマンが主人公の漫画で、映像化された『孤独のグルメ』より、楽しい食堂です。食堂のメニューは、私が見聞したところによると、カレーライスや肉野菜炒め、唐揚げ、豚カツ、ポテトサラダ等が多いようです。地域のレストランや喫茶店の奉仕活動(食品ロスの解消:私の聞き取りから推測?)もあります。

大人の「子ども食堂」利用の場合は、有料が殆んどのようでした。(私の見聞からは)大人一人、一食代500円~800円(平均)が多かったように記憶しています。大人は、また、寄付(高齢者や会社の経営者等)で食事をする人もいます。(地域の人々の交流の場となっていることもあるようでした)

<まとめに代えて>

子ども食堂の全容はなかなか見えてきませんが、さいたま市、川口市、越谷市などの私の見て歩き(見聞録)から生まれた私の中の「子ども食堂」私案を提案させていただきますが、その前に、私のフェイスブックに投稿された「子ども食堂」関連の資料をご紹介します。

○フェイスブックから(多様な広がり)

- ・つなひき無料学習塾(ブフェ式朝ごはん)
- ・和らぎ子ども食堂・NPO 子ども食堂フードパントリー(八街市)
- ・平野宮町みんな食堂・ちやめっこ食堂(鴻巣市)
- ・ぶんこ食堂(文教大学足立キャンパス)
- ・むんぼう(新潟市西区・ゆめとぴあ・NPO 法人子育てネットピッコロ(個人))
- ・体験型科学教室レストアカ(北九州市小倉)
- ・ころばかりの会(山科伯爵邸:京都市山科)
- ・ゆりりん食堂・子ども食堂ノエル・陣が前わいわい食堂(フードパントリー)
- ・とうかつ草の根フードパントリー・まつど子ども食堂・こがねはら子ども食堂(松戸市)
- ・地域でつくろう子どもの居場所(北本市文化センター:社会福祉協議会:子ども食堂+学習支援+プレイパーク+フードパントリー)
- ・ピアサポートカフェ・子どもが真ん中「夢みる小学校」-きのくに子どもの学びの作り方
- ・平野区みんなの食堂ネットワーク(大阪平野区)・池田食堂さくら
- ・利府町無給型子ども食堂・根如(ねごと)子ども朝食堂
- ・アートフィールドくうか(仙台市青葉区柏木地区:配給型子ども食堂)
- ・東日暮里子どもの食堂(荒川区)
- ・NPO 法人「STORIA」ワークショップ-貧困の連鎖から愛情の循環へ(仙台市)
- ・子ども食堂ともキッチン(調布市田園調布:個人)等など

※投稿された皆さんに感謝するとともに、「子どもの居場所づくり」の支援や運営に、これからもご尽力をお願いします。

○夢の「徳ちゃん食堂(子ども支援食堂)」構想

まずは大きな仕事として、場所・食材の確保・ヒト(調理師・運営者等)・運営資金等…の課題の解消が必要です。具体的構想としては、まず

1) 全体として

- ①ヒト…高齢者、学生、養育ボランティア、食材提供者、調理師等
- ②モノ…食材(市場の規格外のもの)、パン・麺類の余剰品。
- ③カネ…寄付(企業の基金:子育て基金)
- ④場所…空き家活用、民間の自宅開放、神社、お寺
- ⑤時間…朝6時～8時・昼12時～14時・夜18時～20時

(ハッピーサンデイ月→2回/月)

⑥情報・通信…お知らせ、広告、通信

(学校通信蘭・町内会報・市区町村の会報)、

2) おやつタイムの設置 ー10時・15時・21時(前後30分)

(子ども食堂開催日→2回/月)

3) 勉強・趣味の時間(「子ども食堂」開催時間と並行して、高齢者・学生との交流の場にも)

そして何よりも必要なのは、

- ① 人の支援・協力
- ② 子ども支援の熱き心
- ③ 人間関係の繋がり
- ④ やがて豊かな社会の実現

ではないでしょうか。

<最後に>

私の「子ども食堂構想」は、終わりなき旅です。

<予録2>

子ども問題対策の失敗をも意味する「子ども食堂」

深谷昌志(東京成徳大学名誉教授)

○世話好きのおじさんやおばさんがいたエピソード

麒麟の田村裕の「ホームレス中学生」(ワニブックス)は、2007年9月に刊行され、3か月で11版を重ねたベストセラーであった。

裕が中学2年の時に母親が病死し、家は借金のカタに差し押さえられる。2学期の終業式の日裕が帰ってくると、住み慣れたマンションの2階の前には家具類が積み上げられていた。帰ってきたお姉ちゃん(高校生)と2人で2階に上がると、家は引っ越しが完了していた。お姉ちゃんは泣いて、「お兄ちゃんの帰りを待とう」と言った。しっかり者のお兄ちゃん(大学1年)が帰ってきた。しばらくしてお父さんが帰ってきた。お父さんは複雑な表情で、僕たちを2階に連れて行くと、(中略)「ご覧の通り、家のほうには入れなくなりました。厳しいとは思いますが、これからは各々頑張ってください。……**解散！！**」と宣言して、どこかに姿

を消す。そして一緒に暮らそうと言う大学生の兄や高校生の姉の誘いを断って、裕は地元の公園で、草や段ボール迄食べるホームレス生活が始まった。

公園の水道で飢えを紛らわす生活が続いたある日、級友のよしや君に公園で出会った。よしや君の家に連れていってもらおう。夕飯を作っていたよしや君の母親は「ご飯食べていくの」と聞き、「食べたい」という返事に、「わかった」と「自分の子どもを扱うような」対応で、裕を風呂に入れ、夕食も食べさせてくれる。そして裕が入浴中に、よしや君から裕の事情を聞き、生活の目途がつくまで裕を家に預かることを決める。その後よしや君のお母さんは、民生委員などと折衝して、よしや君が兄姉と一緒に暮らせる住環境を整えてくれる。

親が無責任で、孤立した子の例をもう一人あげるなら、落語家の桂雀々じゃくじゃく（「必死のバッチ」幻冬社、2008年）の父親は、家で賭博に明け暮れる生活を送った後で、膨大な借金を残して逐電し、雀々は途方に暮れるが、真向いのパン屋のおばさんが雀々の話を聞いてくれ、涙を浮かべながら「とりあえず、家において」と言ってくれる。そして（おばさんの家の）まあ坊、みゆきと3人兄弟のような生活を送るようになる。

かつての社会には、よしや君の母親やパン屋のおばさんのような「世話好きなお節介おばさん（おじさん）」の姿があった。そうした人たちの存在があれば「子ども食堂」は不要であろう。いわば子ども食堂は、地域に子どもの群れる姿が見えない「地域の砂漠化」を象徴しているかのようである。そう考えると子ども食堂の広がり、歓迎ばかりはできないものを感じる。

○地域の陽だまりの場としての「子ども食堂」

食事は家庭生活の基本で、中でも夕食は一家団欒の中核となる時間帯である。時間が多少遅くなっても、両親の帰りを待って雑談をしながら夕食を取る風景がある。そうだとすれば、子ども食堂の運営に当たっても、子どもに食事を与えるだけでなく、何よりも楽しく食事ができるような、あたたかい雰囲気作りが大切ではなからうか。（無料または低額で）子どもに夕食を提供するだけの子ども食堂から、地域の人々の陽だまりとなるような「子ども食堂」である。

○「子ども食堂」を賑わいと活力のあふれる場とするために

働く母親が増えている今日、子ども食堂を必要とする子どもがそんなにも多いなら、子どもの夕食の問題に本格的に取り組むことが、行政の喫緊の課題ではなからうか。また、地域の中に「子ども食堂」のための「特別の場」を設けるのではなく、むしろ学校の（教室の）積極的な活用を図ってはどうか。夕方の時間帯の学校を多面的な活動のできる場として、その中に子ども食堂を位置づける。そこでの夕食は、いわば第2の（小さな）給食の時間でもある。現状のように、有志による、いわば慈善の心に支えられた子ども食堂の姿は何か侘しい。そこに入出入りする子どもの心はむろん、その姿を見る人々の目にも何か侘しいものが映るのではなからうか。

ソウルの学校を訪ねた折に、夕方の学校を活動センターように活用している状況に出会った。テコンドウやパソコン、草花の栽培など、多くの講師が来て子どもたちを指導していた。当然、子どもはお腹が空くので、校門の前に蒸しパンやチジミの屋台が並んでいた。そうした状況なので、夕方の学校は活気にあふれていた。これは学校の夕方を利用した事例だが、日本でも種々取り組みの工夫があっただけではなからうか。

そのためには、まず、教育委員会の関係者だけでなく、当該学校の教員、子ども食堂の運営者、PTAなどによる「〇〇小学校子ども食堂運営委員会」を設置してはどうだろうか。（了）